

# 記念撮影

にんにん堂



「準備……  
出来ましたね」

「それじゃあ  
撮るわよ」



（ぼくお二人と写真が  
撮りたいと言った  
だけなのに……）

（どうしてこんな事に  
なってるんだろう……）



「折角だから穿いてた  
パンティイも映して  
おきましようか♥  
はい、ロ●ツタ」

「そうですね  
記念ですから♥  
では、私の  
パンティイも」



そう言うと二人は  
互いのパンティイを  
渡しあつた

二人の脱ぎたてパンティイは  
撮影により色気をもたらしした



「それにしても可愛らしい  
おち●ちんですね♥」

「ええ、まだ女を知らない  
未使用の皮被りち●こ♥」

「貴重な使用前のおち●ちんの  
撮影が出来て良かったです♥」

「そうね、使い込む前に  
沢山写真撮って  
おきましようね♥」

(使い込む前？  
そ、それって……)







「こ、こんな格好  
恥ずかしいです……！」

「ふふふ、だーめ  
記念なんだから♥」

「被ってるパンティも  
お似合いですね♥」

「あうう……」





「それよりほく……  
私たちのスカート  
掴んじゃってる……♥」

「あら、いいじゃない  
ほく、そのまま  
掴んでてちょうだい♥」

「やだ、ピ●ちったら……  
でも、記念ですものね♥」



「ほら、笑って♡」

「笑顔よ♡」



二人に促されるまま  
ぼくはカメラの前で  
こんな格好をしている

初めは恥ずかしくて  
抵抗もあったが、  
次第にそれも  
なくなってきた



「ぼくがどうしてもって言うからやってみただけど……」

「これじゃあ肝心のぼくのち●こが写らないわ……」

「す、凄いです……お二人の美しくて大きいお尻……そ、それにアソコも……」

「こらあ♥  
「いやん♥」





「さつきぼくにあんな  
恥ずかしい格好させた  
んですから……  
お二人だつてやって  
もらわないと……」

「それは……  
そうですね」

「いいわ  
ぼくが満足するまで  
付き合つてあげる」

「やった♪  
優しいんですね  
お二人とも……♪」





「…ねえ、ぼく  
もういいかしら？」

「まだです  
沢山撮らないと  
記念ですから♪」

「もうぼくっいたら…  
この反り立ったおち●ちゃんに  
イタズラしちゃいますよ♥」

「いいですよ  
その代わりぼくも  
お二人にイタズラ…  
しちゃおうかな？」



「え…？  
ぼくが私達に？  
(ドキドキ♥)」

「イタズラ…？  
(ドキドキ♥)」



「どうですか？  
ぼくのおま●こ弄りは？」



「す、凄いですこれっ●  
こんな場所で  
こんな可愛いぼくに  
大事なところ弄られ  
ちゃうなんて…●」

「興奮しちゃう●  
お姫様相手でも遠慮なしね●  
ぼく…やるじゃない●」



「感じてるお二人も  
素敵ですね♪」

「こんなみっともない姿を  
写真に残してしまう  
なんて・・・チコに  
笑われちゃいますう♥」

「私だってこんな姿  
お城のみんなに  
見せられないわ♥」





「お二人ともそろそろ  
ち●こが欲しくなっ  
てきたんじゃないか？」

「おお●ち●ぽお●  
グチヨ濡れおま●こに  
欲しいのお●」

「ぼくのち●ぽ  
私達のおま●こに  
突っ込んでくれる？」

「突っ込みますよ♪  
ぼくだってもう限界  
なんですから♪」

「そうよね●」

「いいわ●  
ぼく…来てちょうだい●」





「どうかしら？  
初めてのおま●こは？」

「凄いです♪  
こんなに気持ち良い  
なんて・・・」

「そう・・・♥  
なら好きなだけ  
味わってちょうだいね♥」





「ほら見て♥  
うさぎさんが  
こっち見てるわ♥」

「それじゃあうさぎに  
ぼく達が仲良くしてる  
ところ見せつけちゃい  
ましようか♪」

「そうね：♥  
うさぎさん、私達の  
仲良しま●こ見てって  
ちようだいね♥」

「仲良しま●こ：：  
ぼくとピ●チ姫の  
仲良しま●こ♪」

「やん♥中でち●ほ  
ムクムクしてる♥  
ぼくったらエツチ  
なんだから：♥」





「もう……二人で  
楽しんでやって  
ずるいわ♥」

「ごめんなさい、ロ●ツタ  
そろそろ代わるから♥」

「ああん♥早くう……♥  
こんな生殺し耐えられない♥  
可愛いぼくのち●ほ欲しいのお♥」

「ロ●ツタさん  
って……」

「ええ……♥無類の  
シヨタち●ほ好きの  
ドスケベ美魔女よ♥」

「へえ……♪  
人は見かけに  
よらないですな♪」





「ロ●ツタさん……  
お待ちかねの  
シヨたち●ぽですよ♪」

「もう待ちくたびれたわよ……  
おま●こが渴いちゃうでしょ♥」

「え？準備万端の  
ぐちよ濡れおま●こ  
でしたよね？」

「例えの話よ  
レデイを待たせては  
いけませんよ♥」





「すいません  
待たせて  
しまった分  
精一杯頑張  
りますね♪」

「ぼくってば  
優しいのね♥」

「ロ●ツタさんの為  
ですから…♪」

「ねえ…ママって  
呼んで…♥」

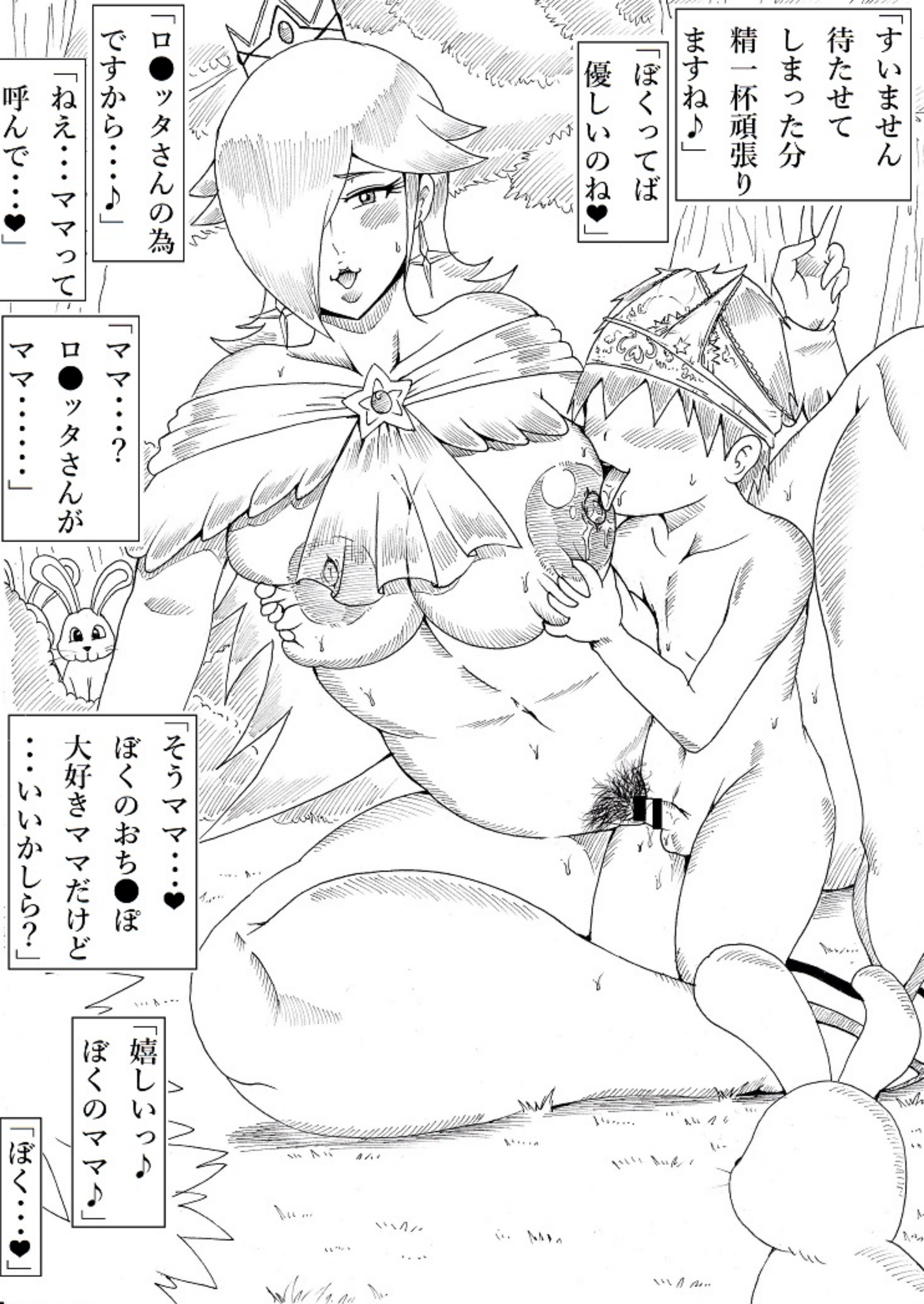
「ママ…？  
ロ●ツタさんが  
ママ…」



「そうママ…♥  
ぼくのおち●ほ  
大好きママだけど  
…いいかしら？」

「嬉しいっ♪  
ぼくのママ♪」

「ぼく…♥」



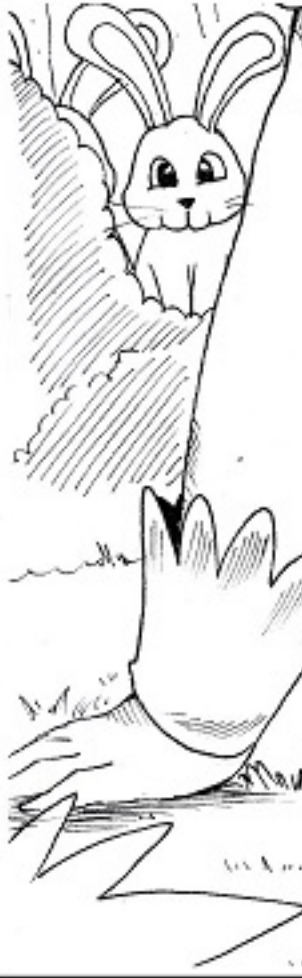


「何よ二人とも  
見せつけ  
ちゃって♥」

「ふふふ♥いいでしょう？  
だって今は私だけのぼく  
ですもの…♥」

「ママー  
ちゃんとぼくの  
相手してよお♪」

「ごめんなさいね♥  
ママ、頑張っちゃう  
んだから♥」



「もうダメえ♥  
オナっちゃうう♥  
私ももっとおま●こ  
したいわあ…♥」





「日が暮れ始めてきたわ  
夢中になってて気が  
つかなかったわね♥」

「ごめんなさいね、ぼく  
そろそろお家に  
帰らないとね♥」

「はい…  
それじゃあ最後に…」

「皆で写真…  
撮りましょうか♥」

「はい♪  
お願いします♪」

「数時間前の初々しい  
未使用おち●ちんが  
今じゃすっかり女を  
知った一人前ち●ぽに  
なっちゃったわね♥」

「さっきまで皮被りの  
おち●ちんだったのに  
ぼくの反り立つこれ…  
生意気な剥きたて  
ち●ぽになってるものね♥」



「日が暮れるまででしたって  
いうのにぼくのち●ぽ  
まだ元気じゃない♡」

「何言ってるのピ●チ  
若い子の性欲は  
並みじゃないわよ♡」

「さすがにち●ちゃんが  
ヒリヒリしますけど  
お二人となら、ぼく  
まだやれますよ♪」

「まあ♡  
言ってくれるわね♡」





「素敵な写真

いっぱい

撮れたわね♥

「はい♪

宝物にします♪」

「それでね…

ぼくが良ければ

今度またここで

写真撮らない？」

「えっ！

いいんですか!？」

「いつになるか

分からないけど…♥

「ぼく、ここへ通い続けますから

だからお二人が来るのを待っています」

「ふふふ♥それじゃあ

楽しみにしているわ♥

「はい…♪」



























